
D.Gray-man ~ **ブックマンの意思を継ぐ者達** ~

小野葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・Gray-man（ブックマンの意思を継ぐ者達）

【Nコード】

N0247I

【作者名】

小野葉

【あらすじ】

いつも通りノアとして活動していたリラは、ある日千年伯爵の元へと呼び出される。そんな千年伯爵がリラに任せた任務とは……？友情等を感じて頂けると幸いです。

リラ・オクローク（前書き）

このストーリーは私が考えた者で、本編のD・Gray-manさんとは全く関係ありません。

しかも、勝手にオリジナルキャラが出てます。キャラの性格崩壊してます。

それでも良いという心優しい方は、ぜひ、先に進んで下さい。

リラ・オクローク

prologue

真つ暗な闇を思わせる美しい夜。

そんな夜にある一人の少女は、ラザ・オクロークと書かれた墓と、その墓の隣の季節 雷斗と書かれた墓に突っ伏して泣いていた。その墓に入っている屍は、少女の両親のもの。

少女は、水色のつやのある長い髪を振り回して誰の目から見ても分かるほど取り乱していた。

彼女は、恨むだろう。自分の両親を殺した、そして、自分の大切な幼なじみにして唯一の友人を、連れて行った胸に銀のローズクロスのある黒い団服を着た集団を……。

そんな少女の元へ、一人のシルクハットをかぶっていて、傘をもっている一人の小太りの男がやって来た。

その男の名前は千年伯爵、悲劇と絆と魂を本に造られるアクマの製造者。

そんな彼の好きな物は…… 悲劇。

彼は少女に、甘い誘惑の声をかける。

「母方名リラ・オクローク、父方名季節小野葉さん、両親をにつきき神から取り返したいと思いません……力……??」

少女の水色の髪から覗く、白い額に浮かんだ黒い聖痕を見た伯爵の言葉が驚きで詰まる。

「……………？アナタは……………、誰？私のパパとママを奪った人達の仲間？……………、リラを、殺しにきたの？」

そう言ってしまったから、わずか十才の少女が肩を震わせる。

そんなリラのおびえきった姿に、千年伯爵はかすかに笑みを浮かべる。

「そんな事しませんよ。アナタを迎えに来たんですヨ」

んっ？どうして？という顔でリラが首を可愛らしく傾げる。

それは、アナタがノアっていう、人間なんかより遥かに優れた種族だからですよ。私の家族だからです」

「????」

リラがやはり分からないという顔でんっ？んっ？と首をさらに深く傾げる。

「今はまだ分からなくてもいいんです。ただ、これだけは覚えておいてください、私たちはあんな奴らの仲間ではなくアナタの仲間だということ……」

そんな千年伯爵の言葉に、まだ涙の筋が残っている顔でリラが微かに笑いながら頷く。

そんな表情には、あいつらは信用できない……、いや、恨むかもしれない、でもアナタたちは信用すると言っているように見えた。こくっ、そんな表情のリラに対して千年伯爵が頷いた。

そして、リラに手をさしのべる。

「おいで、リラさん」こくっ、リラがまたもや無言で頷く。

そして、さしのべられた千年伯爵の手を握った。

「じゃ、行きますか」

そして、千年伯爵とリラは、美しい闇のような夜へと消えて行った。二人で並んで歩いている姿は、まるで親子のようだった。

第一章 ノアの少年

仮想19世紀末

そこでは夜な夜な奇怪が起きていた。

それらには全て、ある光と闇が密接に関係している。

それは――……。であるからして――……。結果的には――……。

パタン。

仮想19世紀末の光と闇、というタイトルのついさっきまで読んで

いた本を水色の髪と紫色の目を持つ少年、リラ・オクロークは本を閉じた。

（な〜にが、西洋の裏歴史を記録した光と闇だよ……。な〜にが、神VS悪魔だ。アクマは、神が与えてくれた兵器。闇と呼ばれる俺らこそ、神の使徒なんだよ……………）
フウウウー……………。

リラはあまりにも無茶苦茶に書かれた本に対して、深くため息をついた。

ガチャッと、ドアの開く音がして誰かが四方八方に本が詰まった本棚や、化学式だらけのリラの部屋に入ってきた。

駆けてきたのは、闇を思わせる黒髪の少女。

そんな少女の服装は、ゴスロリをイメージしたような黒いフリフリのついたワンピースで、髪はショートカット並みの長さまで短く切っている。

そんな少女の姿は、明るさと活発さを思わせる。

「リッラー！リラ、リラ、リラァ〜！！」「どうかしたのか、ロード？」

「あのねエ、千年公に伝言頼まれたのオ〜。……………あつ、リラァ、それなあに？」

机の上の本を、目ざとく見つけたロードの目が興味でキラキラと光輝く。

「ああ、これ？」

リラが『仮想19世紀末の光と闇』というタイトルの本を持ち上げる。

「うんツ！」

ロードが素直に頷く。

「それどんなのオ、面白いイ〜？」

「ちつとも面白くないぞ、ロード。俺たちのことメチャクチャに書いてるぞ」「へエ、聞かせてよオ〜、リラァ」

「仕方ないな」

仮想19世紀末

そこでは夜な夜な奇怪が起きていた。

なので私たちは、それらの奇怪と関わっているとされる光と闇について調べた所、光と闇の正体が分かった。

光と闇の正体は、神と悪魔だったのだ！

それが分かっててもなお、謎は残る。

なぜ、奇怪が起きるのか、神と悪魔がそれにどう関わっているのかを私たちが調べて見た。

すると、驚くべき事がわかった。

歴史上の人物、ノアの一族はいまだに存在していたのだ！

それを決定すべき事件があったのは、この間の夜のことだった。

私たち記者班が森に入った時、何かの物音がした。最初は自分たちのものだと思っていたが、実は違った！その物音は私たちのいる森の入り口ではなく、森の奥深くからしてきたのだ！なので、私たちは足音を抑えつつ、森の奥深くへと侵入した。すると、そこには異様な光景が広がっていた。ボール型の化け物がいて、宙に浮かんでいるうえに、一人の青年と19歳くらいの少年たちが戦っていたのだ！19歳の少年の方を観察してみたところ、少年の武器はまさしく異様だった。その武器は、なんとなんの変哲もないフルートなのだ。そして、そのフルートを吹き続けている。まるで、そのフルートの音色が攻撃だとも言わんばかりに……。

でも、もう一人の青年には特に何もみられなかった。

だが、それも違った。動けない少年の体に腕を差し込んだのだ。悲鳴がなかったうえに傷口がなかったところをみるとその青年の特別な能力らしい。そして、次の瞬間、その青年は、

「これが、オレのノアの能力」と言ったので、我々は耳を疑った。だって、ノアは歴史上だけの人物だったはずだ！

なのに、この青年は自分のことをノアとハッキリ言ったのだ。この事実から、私たち記者班は、ノアの一族は悪魔の味方、要するに、

悪魔の直属の部下だと確信した。

きっと、あのボール型の化け物が悪魔だったに違いない。

私たち記者班は、神に違いないあの少年に味方する事を神に誓おう。

～end～

「ギャハハハハハハハッ！！！」

本の内容を最後まで聞いてから、ロードはいきなり大爆笑し始めた。

「馬鹿だよ、リラア。その記者、馬鹿だよ～」

「そんなに笑ったら可哀想だろうが。……………あつ、そういえば

ロード、千年公の伝言は？」

……………。

しばらくの沈黙。

「……………すっかり忘れてた。千年公からの伝言はね……………『今すぐ来てください』だって」

……………。

「それを早く言え！」

リラは、いつも着ている全身を覆うほどのコートのフードを深くかぶり直し、殴るような勢いでドアを開けて、千年公の元に急いだ。

リラの心の中にロードへの殺意が微かに浮かんでは、言うまでもない。

リラの部屋に一人残されたロードは、小さくポツンと呟いた。

「……………面白いけどオ、この内容はちよつと、やばいかな……………」

……………」

第二章 記者班察・殺 ～察～

ロードに伝言を教えてもらってから、わずか三分後。

リラは千年公の部屋の前にいた。

トントン

「どうぞ？」

中から千年公の返事が聞こえた。

リラは、来るのが遅れたので、何を言われるか内心ビクビクで、本当は部屋に入るのだって怖かった。

（まっ、入ってみるか……。もしかしたら、運良く怒られないかもしれないし……）

そして、決意を決めたリラが部屋に入ろうとすると、ドンツと後ろから誰かがぶつかってきた。

「いつてえな！」

自分からぶつかってきたくせに人に文句を言つてやがる。

「それは、こっちのセリフですウ！」

リラは、イライラしながら振り向いた。すると、そこにはノアのテイキ・ミックがいた。

「テイッキー？」

リラは、驚いてその場に尻餅をついてしまった。それと同じく、ビツクリしたテイキも目を見開いた。

「テイッキー？」

「あ？リラ、お前もなにか用事か？ほい、立てるか？」

テイキは尻餅をついたリラに手を差し出す。

リラはテイキに一言サンキュ』と言ってから手を借りて立ち上がった。

「実は俺、千年公に呼ばれたんだよ」

「あ？お前もかよ、オレもなんだよ。でも実は、くんの遅れてな」
テイキが頭をかきむしる。

「実は……俺もなんだよ」

リラが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしてフード越しに頭を撫でる。

「でも、まっ、怒られると決まった訳じゃないしな」

テイキがそう言う。

「そうだな」

リラもそれに同意する。

トントン

リラがドアを叩く。

「どうぞ」

「しつれいします」

ガチャン

リラが硬く、冷たいドアノブを回して部屋に入る。

「遅かったですね、リラ、ティキぽん？」

千年公が笑いながらも少し顔をしかめている所を見ると、相当ご立腹な様子だ。

「まあ、いつもなら我が輩を待たせるなどもつてのほかですが、今回は急ぎの任務なので許します」

千年公の言葉にリラが文句のある顔をする。

「えエー、任務？しかも急ぎの？」

その言葉にリラがブーイングをする。

「行きますよね？」

千年公が笑い顔のまま凄む。

「うっ！」

リラが気迫におされてうめき声を上げる。

「い、いいい、行き……ます」千年公は、その言葉を待っていたとでもいうように顔をほころばせる。

「はい、これは地図と無線です。コレを頼りに行動してくださいネ？」

そんな事があつてから二時間後。

リラとティキは私服に着替え（リラのはもともと私服なのでそのまま）、記者班のいる新聞社に来ていた。

「おいリラ、ここで、間違いないんだな？本当か、オイ」

ティキがリラに本当に新聞社か、聞き直す。

まあ、それも無理はない。なぜなら、目の前にあるのは今にも崩れそうな小屋だったからだ。

「いや、間違いないんだよ。ここなんだよ、ティキ……」

リラがその建物のボ口具合を、コンコンと叩いて確かめる。

その次の瞬間、カサツという微かに落ち葉と落ち葉がこすれる音がして、黒い団服を着たエクソシストが尖った爪のついた手で、殴りかかってきた。

その懇親の一撃を軽々とかわし、リラは遠くへと飛び退いた。

「ちっ、エクソシストか！ ティキ、無事か？」

リラが周りを見渡すと、高い木の枝に立っているのが見える。

フー……。

リラは、安堵のため息をついてから、自分の襲撃者の顔を見ようと、頭を上げた。

次の瞬間、リラは息をのんだ。

だって、そこにいたのは、ブックマンと、エクソシストと消えた、自分の幼なじみの姿があったから。

「ディック……、ク？」

（変だ。敵がディックだとわかった途端に、体が動かない……。な……んで……）

ガクガクと、いきなり膝が震え出す。

（動け……、動け……、動けっ！ 敵のエクソシストが、目の前に……。やられる？）

そう思った瞬間、体がフワッと浮き上がって、気づいたらティキに抱きかかえられて木の上だった。

「気をつけるよ！ どうかしたのか？」

「ディック……、ディックが……」

「ああ？」

「幼なじみ……だよ」

リラはブルブル震えながら言った。

「昔の事、思いだしたのか？」 ティキのその言葉に、震えながら頷くリラ。

「大丈夫だよ」

ティキが力強くそう言うと、自然とリラの震えが収まった。

（不思議だな……、さっきまであんなに震えが止まらなかったのに……）

「もう、大丈夫だ！サンキューな」

リラは、自分の血液をクナイ（江戸時代などに忍者が使用していた武器）に変え、白髪のエクソシストに切りかかった。

ティキは、ディックにだ。こちらはほぼ互角、ティキの方はやや優勢といったところか。

だが、それは今の時点ではの話。

ティキの方は知らないが、本気を出せばこいつらを倒すなど、赤子の手をひねるようなものだ。

「ちっ……！」

ディックの声が聞こえてくる。

どうやら、ティキが未だに優勢のようだ。

（さっさと終わらせよう。楽しいけど、任務優先！）
すうー……

さっきから攻撃に使っている血液のクナイに、覆うようにしびれ薬を塗ってから、今までの何百倍ものスピードで白髪のエクソシストに向かって投げた。

「うわああああ」

クナイはキレイに白髪エクソシストの肩に当たり、相手は悲鳴を上げた。

「大丈夫か、アレン？」

どうやら、この白髪のエクソシストの名前は、アレンというらしい。

「つつ……、はい？そっちはどうですか、ラビ！」

（えっ……？ラ……ビ？……… 当たり前か。ブックマンは、心残りもなくすためにコロコロ名前を変える。そうか……、ラビ……… か）
そんな風にリラが考えながら攻撃をぬらりくらりとかわしていると、後ろでティキの声がした。

「リラ！ここはいったんひくぞ！」

「なんでだよ、せっかく楽しくなってきたのにイ！」

リラが不満そうな態度をとる。

「オレだって、やだよ。たーだ、千年公の命令だからしかたなく」
「命令？」リラが、自分の無線に連絡は入ってないのにと不思議そうな顔をする。

「ああ、オレの無線に、な」

「俺の無線には入ってないぞ？」

「んっ？それなんだがなア、千年公が間違っつて壊れた方の無線をお前に渡しちまったらしいぞ」

ふーんという顔でリラはエクソシストにきちんと、向き直る。

「んじゃ、3・2・1で……」

リラは、いったんフウー……と体の力を抜き、アレンとラビに爆弾（？）らしきものを投げつけた。

「てったあーい」

「オーケー」

リラの言葉にティキは反応して、足元の空気を拒絶し、空気の上を素早く走り去る。

もちろんリラ本人も、かろうじて目に見えるほどの凄まじいスピードで遠くの木々に飛び移る。

一方アレンたちは……。

「てったあーい」

ノアの長いローブを着た少年らしき人物が、爆弾（？）らしきものを投げつけてきた。

（くっ……すっげえスピードさあ。逃げらんねえ……！！）

ラビは即座にそう判断し、槌を前に突き出し、自分とアレンを覆った。

そして、爆弾はどんどん近づき、ボンツと爆発した。

「へっ？」

「えっ……？イチヨウ？」

アレンは、驚いて、爆弾らしきものの中から飛び出したイチヨウの

葉を手にとった。

何の変哲もない普通のイチヨウの葉である。

「なっ……？び、びび、びっくりしたさあ！」

そして、ラビは何かを思いだしたように周りを見渡す。「そうだった、ノアはっ？」

だが、時はすでに遅く、ノアの2人には逃げられていた。

「クッソー！」

「けど、新聞社のあの本の内容からして、何かノアの情報をつかんでるはず！！それを千年伯爵が見逃すはずがありません。ノアは、絶対にまた戻ってきます……」

トンツと、ティキより一足先についたリラが地面に降り立つ。

トスツと、ティキより一足先についたリラが地面に降り立つ。トスツ、続いてティキも地面に降りる。「リラ、お前何でそんなに速いんだよ……」

「鍛えたからな」

「ふーん」

……。

一時の沈黙がながれ、ふと思い出したようにリラがポンツと、手を叩く。

「そういえば、千年公が情報を引き出してから記者班の奴らを殺せつつあったよな？」

「んっ？ああ、そうだな」

「それで俺考えたんだけど、記者班の仲間として入り込むのはどう？俺の操作能力で記憶を操作して……」

それから一時間後

リラは記者班の奴らと一緒にパソコンで仕事をしていた。

カチャカチャカチャッ

（うまく、こいつらの記憶を操作して忍び込めたな……）
ブッ、ブブ、ブブブッ……ブッ。

【おいリラ、成功したか？どうだ？】

無線が微かに音を立てて、それからティキの声が流れ出す。

「あ？誰に言つてんだ？大天才リラ・オクローク様だぞ？きちんとつい最近入った新人の季節　梨嵐っつーことにしといた。ちなみに名字は、日本人だった俺の父親のもので、名前はリラだから梨嵐だ」

【ああ、はいはい。んで、悪かったな。お前、ローブ脱いで素颜さらすの嫌いなのにな】

「んっ？まあな。でも、操作能力で顔いじくつてあるから、素颜じゃないし」

【そうか、悪いな。エクソシスト達に顔を見られてなくちゃあな、オレが行ったんだけど】

「ふう〜ん。んじゃ今からお前の顔、少し変えてやろうか？大丈夫、1日たつたらもとにもどるから」

【遠慮します】

「ところで、そっちはどうだ？エクソシストは見つかったか？」

【ああ、見つかったには見つかったんだが……。記者班の奴らと一緒だ。護衛的な感じで離れようとしな】

「そっか……。それじゃ引き続きたのむわ。情報を引き出すのは俺に、任せて？」

【じゃ、頼んだわ】

ブブッ、ブブブッ……ブッ……ツ……。

微かな雑音が入り、ティキの声が途切れた。

「おい、ティキ……。言い忘れた事が……。ティキ？おい？」

壊れているというのは本当らしく、こちらからいくら話しかけても反応がない。

（本当に壊れてたんだ。……。て、何疑つてんだ俺？疑う必要なんて、どこにもないんだ。そう、どこにも……。でも、あの完璧超人の千年公が間違つて壊れた無線を渡すなんてありえるのか？……。つて、また疑つてるしー！）

「あゝ、もういやだよ。……。こっやって仲間を疑うのも！俺って、

千年公たちを……信用できて……ないのか……？」

リラは思いつきり自分の頭をかきむしってから、小さく消え入るような声で呟いた。

ブツ……。

【大丈夫だよ。信用しろよ、オレ達の事。オレら……家族だろ？】

無線は、微かな雑音をしたかと思うとリラの耳にハッキリしていて、それでいて安心するような気分にさせるティキの声が響いた。

「うつわ！ティキ！？」リラはいきなりのティキの声に小声にするのさえ忘れて叫ぶ。

【うつわ、バカ！大きい声だすな？】

「ごめん」

リラが小声で呟く。

だが、先ほどの大声にビックリした記者班の連中がリラの周りに集まってくる。

「どうかしたのかい、くん」

記者班のリーダー格、ジョン・グレックが聞いてくる。

「いいえ。自分は大丈夫です。ただ、記者班の頭のイイ皆さんについていくのが精一杯なので、精神的ストレスから、弟の幻覚を……」そう言つてリラが微かに笑みを浮かべる。

「ふんっ！情けないわね。まったく、凡人はこれだから困るわ。ま、私の実力を越せる天才なんていないでしょうけど」

この嫌みな女は、レイラ・フラン。

どっかの元お嬢様らしく、ミヨーにプライドが高い。

「てめえ……！！」

リラの笑みが思いつきりひきつる。

【落ち着け、リラ】

無線からため息混じりのティキの声が聞こえてくる。

【この状況を坂手にとれ。お前ならできっただろ？】

「ああ……。その代わり、無線……切るなよ……」
小さくリラが呟いた。

「んっ？何か言ったかしら、凡人？」

(……よしっ？)

カチッ。

自分の頭の中で私事と仕事とを分けたスイッチが切り替わることを想像する。

仕事だと思つと、さっきまでのイライラしてた感情が嘘のようにひいていき、冷静に物事を判断できるようになった。

「なっ、なんなのよ凡人。あなたごときが私の顔に見入るなんて百年はやくてよ」

相変わらずの人をイライラさせる喋り方である。

さっきまでのリラなら200%キレていたであろうこのセリフも、仕事モードのリラの耳には入らない。

「それはもうしわけありませんでした、マダム」

そう言いながらリラは、ニッコリと微笑んでレイラの手にくすをした。

ぼぼぼっ！

レイラの顔がいきなり真っ赤に染まる。

「ま、ままま、まっ、ししし、仕方、な……いわね」

(……女ってやつは……単純すぎてやんなんな。まあ、うちのロードは例外だが……。んっ？でもあいつ、アレンなんとかってやつに惚れてんだっけ。さっきあつてみたけど、ティキやロードがあそこまで入れ込む価値がある人間なのだろうか……？)

そう考えてしまつてから、リラはいいやと首をふつた。

(今の俺には関係のない事か……。それより話を聞き出さねば)

「そういえばみなさん、『仮想19世紀末の光と闇』という本を出版していらつしゃいましたよね？自分、少しばかり悪魔と神に興味があるのですが、悪魔達を見たときの事と、知っている事全て教えていただけませんか？」

「いいですよ。あの時の事を話しましょう。実はですね……」

ジョンが体験したこと、聞いたこと、そして知っている事全てを話

し終える。相変わらずの人をイライラさせる喋り方である。悪魔達を見たときの事と、知っている事全て教えていただけませんか？」

「いいですよ。あの時の事を話しましょう。実はですね……」

ジョンが体験したこと、聞いたこと、そして知っている事全てを話し終えた時には、もう明け方の3時でした。

「これで、全部です。大体、本と同じ事を喋っていましたが、飽きませんでしたか？」

ジョンがそう言うのと、今まで黙っていた残りの記者班の双子のヤン・スルースとスワン・スルースが口をそろえて喋る。

『ま、大体……じゃなくてゼ・ン・ぶなんだけどね』

2人同時に喋っているのに双子のせいか、きちんと聞こえる。

『っていうかお前、内容分かったか？』つか新入りのくせにさ、あんま出過ぎた真似すんなよ』

それから2人がいったん息を吸う。

「バカが！」

「アホが！」最後だけ2人が初めて違うことを喋る。

しかし2人共顔がそっくりのため、どちらが何を言ったのか分からないらしい。（けど、よく見ると微妙に違うんだよな。ま、そんな事はどうでもいい。さあ、仕事を始めるか……）

【ティキ、最初の仕事は終わった。二番目へ移るぞ】

リラが注意を払って小声で話しかける。

しかし、ティキからの応答はない。

（……あいつ、無線るなつったのに切りやがった！！ティキめ……）

リラは心の中でティキを毒づきながら外の様子を想像する。

（ティキからの応答がないっつーことはこちらが危ない状況にはないっつーこと。仕事を始めても……平気だな。よしっ！やんぞっ！）

「ところで季節くん、内容分かったかい？聞き漏らしはない？」

ジョンが優しく、そして丁寧に聞いてくる。

「んっ……、あつ、一つだけありました」「なんだい？」

その言葉に対してリラがニツコリと不適に微笑む。

「皆さん、死にたいって思ったことはありませんか？」

「いきなりなんだい？」

さすがのジョンも微かに眉をひそめる。当たり前だ。

誰だっけいきなりそんな事を聞かれては不愉快である。

「だから、死にたいと思ったことはありませんか？」

『ないね！んなもんあつてたまるかよ』

双子が相変わらず人をバカにした口調で喋る。

「私は特にありませんわよ」

「僕もかな。やりたいことがまだ残ってるからね」

最後にジョンが言い終わった時に、リラは自分の背中に手を回し、自分の体内の血液の一部をクナイにして、抜き出した。

「季節くん、君はどうだい？」

「自分もです」

リラがそう答えると心なしか、ジョンの表情が曇る。

「そうか……それは残念。まだ死にたくないんだね？」

「はい」

リラが笑顔で即答する。

「うん、本当に残念だ。でも……君には死んでもらう」

「何故？」

「君を上手く殺して、悪魔と神のあの話を、現実にあったことだと分からせるのさ」

そう言ってからジョンは、懷から拳銃を取り出す。

そんなジョンに向かって、リラはイスから立ち上がり、ゆっくりと歩いてきた。

「うつ、動くな！動くと撃つぞ！！！！」

そういわれても、リラは歩くのを止めようとしなない。

バーン！！！！

ジョンがリラを拳銃で撃ち、その銃声が響く。

「お前が悪いんだ……。止まらないから」そう、消え入りそうな声

で呟いてからジヨンは、傷一つない姿で自分へと歩いてくるリラに目を見張る。

「バ、バケモノー!!」

「だけれがバケモノ？ 侵害だな。あのくらい、鍛えたら誰でもできる。ただクナイで弾をはじいただけだからな」

こちらに向かつて歩いてくるリラに、スツカリびびってしまったジヨンが、尻餅についてあとずさる。

「……………ヒツ？」

記者班とリラの間に僅かな沈黙がながれる。

それからリラは、何かを思い出したかのように手をポンッと叩いた。

「そういえば、記者班の皆さんはみたんだよね、ノア？」

『はっ……………はい……………』

さすがの双子も、憎まれ口を封じているようで敬語を使っている。

そんな記者班の連中を見ながら、リラは頭の上の髪を縛っているゴムに手をかけた……。『

続く

リラ・オクローク（後書き）

この後は、ついにリラが記者班達に素顔を見せます！！（キヤー！！！！）

リラの過去が明らかに！！

彼女がエクソシストを嫌う理由とは！？

今回の投稿は、21日～22日です。

ぜひぜひ期待していて下さい！！！！！！

第2話 諸刃の剣とglassのmind（前書き）

少しだけ残酷な描写が出てきます。

第2話 諸刃の剣とglassのmind

そして髪を下ろし、その髪をわけ、額の聖痕を記者班に見せた。

「そつ、それは……ノアの聖痕？」

レイラが驚きの声を上げる。

「せいかゝい、君達の推理はね、とーっても面白かったよ。でもねえ、いくつか間違ってたかな。まず、一つ目。一つ目はア、アクマは俺らのボスじゃなくて俺らが、アクマのボス」

その言葉を聞いて記者班の奴らがあどすさる。

「二つ目。二つ目は、俺らノアと戦ってたのは、神の使徒じゃなくてアクマ退治専門のクラージマン。ホントの神の使徒は俺らノア。分かった？」

そう早口で言い切ってから、リラはチラッとジョンを睨んだ。
その鋭い視線にヒッ、と小さくジョンが悲鳴をあげる。

（さて、コイツらをどうしようか？記憶を消して逃がす？1人や2人ならまだしも、4人は少しキツイな……）

「ノ、ノア様、私達をど、どうするおつもりで？」

「そつ、それ……！それなんだよ！……うーん、今それをどうしようか悩んでいるんだよね。ま、一応君らの意見を聞こうかな？」

その言葉に4人が顔をほころばせる。

「あ、あの、私達が、ノア様方のア、アシスタントをするというのはどうでしょう？いいいい、一生懸命がが、頑張りますから！！！！」
「うーん、どうしよっかなあ？ティキはどう思う？」

リラが窓の方を向き、いきなり誰かに話しかけたので、驚いて記者班全員が窓をむくと、いつの間にか閉まっていた窓は開かれ、そこにはタキシードを着て、シルクハットを被った1人の青年がいた。

「お、お前は、あの時のノア！？」

ジョンがティキを見て叫ぶ。

どうやら、戦闘を普通の人間に見られたマヌケなノアというのは、ティキだったらしい。

「あ？ってことは、戦闘見られたノアってオレ？」

「……らしいな。ホントにマヌケだな、ティキ。んで、こいつらどうする？」

ビシッ！とリラが記者班を指差す。

「殺す。だって、姿を覚えられたら面倒だし、こいつら殺すのが元々の任務だしな」

「まあな、じゃ俺が、リーダーと双子をやる。ティキは女を頼む、色男サン」

リラがからかったような目つきでティキを見る。

「あ？今変えるよ。苦しみは一瞬で、が俺のモットーだからな」

そう言ってからリラが不適に微笑む。

そうして体内に、またクナイを戻し、今度はクナイ以上の量の血液を大きな鎌に変形させて体から取り出す。
そして、ブルブル震えるジョンたちに鎌を向ける。

「大丈夫。痛みは一瞬のはずだから」

リラは優しくそう言った。

人とはあまりしゃべるタイプじゃないリラにとっては、精一杯の優しさである。

それに比べてティキは、色男らしくノアなりのやり方で優しくレイラに接する。

「女は無理せずキレイに死ねよ」

そう言つてティキがレイラの細い首をきつく締め上げようとしたとき、2人の後ろでパリーンとガラスの割れる音がしたので振り向くと、そこには白髪と赤毛のエクソシストのアレンとラビがいた。

「そうはさせません！！！！」

アレンがすぐにクラウン・クラウンを発動させてリラとティキに襲いかかる。

しかし、そんなことでひるむ2人ではない。

すぐに自分担当の人間を担ぎ上げて一定の距離をとる。

「またかよ、エクソシスト。いい加減にしろよ、何回俺らの邪魔すれば気が済むんだ？」

次にラビが自分のイノセンスの鉄槌を発動させて戦闘態勢をとる。

「ずーっとさ。お前らノアの野望が打ち碎かれるまで、お前らを倒すまで永遠に邪魔してやるさ」

「そつか。んじゃ、邪魔者には消えてもらはないとね。この世からも……俺の心の中からも」

リラが、最後の方だけ呟くように小さくそう言った。

そんなリラの様子に気づいたのか、ティキがリラに声をかける。

「リラ……」

「大丈夫。大丈夫、大丈夫なんだ。大丈夫なんだよ、ティキ。お前らが俺に勇気をくれたから、本当に大丈夫なんだ、安心しろよ」

不安そうなティキの声をさえぎり、リラが力強くそう言う。

そんなリラの様子に心なしか、リラを心配するティキの顔に安堵の色が見える。

ズバンッ！！

そんな2人の仲を引き裂くかのように、ラビが2人の間に鉄槌を振り下ろす。

「つつー！！」

その時、避けるのが一瞬遅れたリラに微かにラビの鉄槌が当たり、リラの髪留めのゴムが弾け飛んだ。

ゴムに力を集中させて顔や体格を変えていたリラが、ゴムが弾け飛んだ事によって、もとの姿戻る。そんなリラの姿にアレンが絶句する。

「あなた……、女性だったんですね……？」

「ああ」

リラは小さくそう呟いた。

そしてラビといえば、絶句しているアレンとはまた違う反応で、ただひたすらにうつむいていた。

「どうしたんですか？……ラビ??」

「……のは」

「は？ラビ??」

「……小野葉さあ」

「小野葉って誰ですか??」

アレンのその言葉にラビがいきなり大声をあげてリラに話しかける。
「お前、小野葉だろ？な……んで、なんでノアとしてここにいる？
どうして俺に平気で殴りかかれるんさ？俺ら、同じブックマン一族
の仲間だろ！」

「……小野葉？誰の話をしている？俺の名前はリラ・オクローク。

季節 小野葉の名は、女の自分と共にとこの昔に捨てた」

「おい、小野葉っ！……！」

それでもまだ喋ろうとするラビからリラを守るかのように、ティキ
がリラの前に出た。

「うるせえ。……眼帯君、リラはなあ、もうその名を捨てたんだよ。
ノアになったんだ。何も知らないくせにリラをかたるな。だから黙
れ、エクソシスト！」

「小野葉の事を知らないのはどっちさ？俺と小野葉は長い間、ずう
ーっと一緒にいたんだぜ??それでも知らないっていうのかよ？」

「えっ？えっ??話の内容が理解できないんですが……ラビ??」

一人だけ話についてこれていないアレンがラビに助けを求める。
そんなアレンの為にリラが話し初める。

「10年前だよ。事の起こりは」

第三章 諸刃の剣とglassのmind

10年前のクリスマス

「お父さん！お母さん！！これ、クリスマスのケーキとプレゼント
??」

当時、まだ五才のリラがクリスマスのケーキとプレゼントを前に無邪気に喜ぶ。

「フフフフ……。そうよ。今年も一年良い子にしてたご褒美！！」
「ま、それはいいとして飯にするか。ラザ、小野葉」

リラの父親の季節 雷斗と母親のラザ・オクロークがリラに微笑む。
フフフフ……。ハハハハ……。アハハハ……。そんな笑い声がたえないクリスマスだった……。
いや、そんな感じのクリスマスで終われるはずだった。

ザ……。ザザ……。ザザザ……。

微かにラジオから雑音が流れ始める。

「ん？何かしら？？何かのニュースなのかしらねえ」

「ああ、そうかもしれないな。ラザ、ラジオのボリュームを上げてくれ」

「分かったわ」

そういつてラザがラジオのボリュームを上げると、ラジオキャスターのアニメ声が耳に飛び込んできた。

『だ、大ニュースです！ええつと、アメリカのマサチューセッツの沿岸付近で何やらボール型の化け物が暴れているとの情報です！！今、実際に目の前に……。え？うそ、こっちに来ないで！！！！いや、いや、いやああアアアア……。！！！！』ゴキユ、ガキユ、ゴキギ

アニメ声のラジオキャスターの悲鳴が響いたと思うとそれに続き、何やら奇妙な、そして不気味な音が響いた。

そしてラジオからはラジオ独特の微妙なノイズが響く。そしてやがてそのノイズ音しか聞こえなくなる。

「雷斗……」

ラザが不安そうな声を出す。

「ああ、アクマだ」

「……行くの？」

「ああ、これが俺の仕事だからな」

その時、家の中にトントンツというノックの音が響く。

「ラザ……」

「あゝ、誰か来たみたいね。私、出てくるわ」

一瞬ためらうような素振りを見せながらも、雷斗は何も言わず黙り込む。

トントンツ

さっきのノックの音に続き、またノックの音が響く。

「はい、今出ます。少々おまちください」

そう言ってからリラは一応念の為、覗き穴から外をのぞき、本物の人間であることを確認してからドアを開ける。

次の瞬間、今まで宅配便屋の格好をしていた男がそのジャンパーを脱ぎ捨てつつ隅によけて、その男の後ろにさらにもう一人隠れていたエクソシストの男がラザに切りかかる。

「つつ……」

続く

第2話 諸刃の剣とglassのmind（後書き）

次は、ラザ&雷斗VSエクソシストです!!!!!!
白熱のバトルシーンです!!!!!!
お楽しみに!!

次回の投稿は、22~24日です。
遅れた場合はスミマセン。
なるべくしないようにしますので!!!!!!

第三章 リラの過去（前書き）

D・Gray-manの連載を、今度から定期的にすることにします。

D・Gray-manの投稿日は、毎週金曜日（来週から）の9時～11時までになりました。

ぜひ、これからも皆さんご覧下さい。

第三章 リラの過去

「つつ……」

ラザが、微かに呻く。

「なっ、何をするんですか!!」

「うるせえよ、ノアがほづくな。オレは黒の教団のエクソシストだ。
『なっ、何をするんですか!!』
じゃねーだろ」

「わっ、私は普通の人間です」

エクソシストがラザに詰め寄る。

「ほう……？あくまで自分は人間です……か。なら、どうしてノア
が普通の人間ではないと判断した？エクソシストも含め……な」

エクソシストが意地悪く笑う。

「殺す前に聞いといてやる。お前、名前は？」

「ふざけないでください！殺すとか、何なんですか！？それに、他人に名前を聞く時は先に自分の名前を名乗ってください！！マナー違反です」

「お前……気に入らそうだね。その強情さ。いいねえ。オレの名前は、リラ・オクローク。あんたは？」

「……ラザ。ラザ・オクローク」

「ヒュー。同じ名字かよ。運命を感じるね」

エクソシストが喋りながらラザに近づく。
その時、トントントという足音が響いた。

「ラザ？」

その足音の主は季節 雷斗。

雷斗は、ラザの元へ駆けつけ、ケガの具合を確認すると、改めてエクソシストの顔を見る。

「何でだ！！何でエクソシストが普通の人間を襲う！？」

「普通の、か……。面白いコト言うねエ」

エクソシストは、刀を片手に雷斗を睨みつける。

「で、アンタの奥さんの“どこが”普通なんだ？」

「うっ…」

雷斗は言葉に詰まる。

どうやらラザがノアだというのは完璧にバレているようだ。

「ひっでえよなあ。エクソシストを辞めてオレらを裏切った上に、今度はノアの奥さんかよ？」

エクソシストは意地悪く笑うと、しかも、と言葉を繋げる。

「子供までつくっちゃって、まあ。あらあら、本当に仲が良いこと
っ」

続く

第三章 リラの過去（後書き）

すいません…、次回のあとがきで、白熱バトルシーンと書いてしまったのですが、誤りでした。バトルシーンは次の投稿です！！

第四章 雷斗とラザ（前書き）

かなり間が空いてしまつて、すみませんでした！

第四章 雷斗とラザ

カラカラとエクソシスト……リラが笑う。

「なっ！？お前……！」

頭に血が上った雷斗は完璧に戦闘体制に入る。

「行くぞ、エクソシストオオ！！！！！」

一方、小野葉はリビングで一人、ただひたすらに両親を待っていた。

「お父さんとお母さん……遅いなあ」

いつまで玄関でお客様の相手をしてるんだろう？と思った小野葉は、静かに扉を少しだけ開けて、隙間から両親の姿を覗く。
そこで小野葉が見たのは……。
血まみれの姿で倒れていた両親の姿。

「お母さん、お父さん！！！！」

小野葉は扉を乱暴に開け、2人の元へ駆け寄った。

…………… 2人以外の間が居ることにも気づかずに。

2人はもうすでに生きておらず、ただの肉の塊と化していた。

「お母さん、お父さんー！！！！うゝ あああ！！！！」

ただただ少女はむせび泣いた。

そんな少女の後ろから、刹那に声が響く。

「アンタ、この2人の娘？」

小野葉が顔をあげると、顔が血で汚れた一人の青年の姿が目に入った。

両親の死と、知らない人間…。

この二つがとてつもない恐怖を彼女に与える。

「お、兄さん…………… 誰ですか？」

震える声で青年に問うと、青年は口元を緩めた。

「オレ？オレはリラ・オクローク。アンタの両親を殺した死神ですが？ついでにアンタも殺しておくかなあ…」

“両親を殺した”。

このセリフを聞いた途端、目の前が真っ白になった。何がなんだか分からなかった。

気がつけば……。

目の前には死体となった青年が転がっていた。それになぜか、手には大きな鎌が握られていて、その鎌には色鮮やかな血が付着している。

「な、なんで……血？した、い……？この、が殺したの……？」

絶望感が胸に溢れる。

どうしていいのか、小野葉には分からなかった。刹那、額に激しい痛みが走った。

「うゝ あああ！！」

とっさに手を額にやると、鮮血が溢れ出す。

ズキズキと痛むその傷は、なぜかひし形のもので、それが額中に広がっている。

その痛みに耐えているうちに、段々と頭が冷めてくる。冷静になってくる。

両親を殺した相手に同情なんかする必要はない。

寧ろ、これが天罰なんだ。
小野葉は小さく呟いた。

「そうだ……お父さんとお母さんを埋葬しなくちゃ……」

小野葉はその小さい身体で、自分の父と母、両方を担ぎ上げた。
そして、そのまま二人を夜の町に運び出す。
そして二人を土に埋めると、その上に木の看板を置く。

『ラザ・オクローク 此处に眠る』

『季節 雷斗、此处に眠る』

改めて父親と母親が死んだことを確認すると、いきなり涙が溢れ出す。

小野葉は思い切り泣いた。
思い切りむせび泣いた。

prologueにつながる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0247i/>

D.Gray-man ～ ブックマンの意思を継ぐ者達 ～

2010年10月9日18時44分発行